

## 画像に意味があるとはどういうことか

—W.デイヴィスの画像の知覚起源理論と E.H.ゴンブリッチの美術論—

名古屋大学文学研究科哲学専攻 博士前期課程2年 井上 佳奈

本発表では、ホイットニー・デイヴィス(Whitney Davis、以下デイヴィス)の画像制作(image-making)の起源に関する議論を考察し、その中でもデイヴィスのエルンスト・ハンス・ゴンブリッチ(Ernst Hans Gombrich、以下ゴンブリッチ)の画像制作の起源に関する主張への批判を中心にみていく。この考察から、人間の画像解釈と画像制作とはどのように関わっているのかを考えるのが、本発表の目指す試みである。

デイヴィスは Davis1986 において、ゴンブリッチの投射説の見落としを批判している。ここで用いる投射とは、例えば車の一对のヘッドライトの配置に自分のイメージした動物などの顔の形を投射して、顔として見るといったものである。この投射説への批判の核心は、ゴンブリッチが人間には表象能力があるということを前提としているという点である。つまり、ゴンブリッチの投射説において人間があるものがある別のものとみなすという能力が前提されているというのである。デイヴィスはこのあるものがある別のものとして見てしまう能力の起源を、人間の視覚体系の特徴に還元することで説明しようと試みる。

また、ゴンブリッチは投射する対象から想起されるイメージについて制作者の経験や歴史からイメージが選択されるとしているが、デイヴィスはその経験や歴史がどのように作られたのかという起源の説明がゴンブリッチではなされていないことを批判している。デイヴィスは主に Davis1987 において、あるものがある別のものとして見てしまうという原初の「～として見る」体験 (seeing-as) を保持する印の複製の連鎖から、画像解釈における文脈の慣習が発生すると主張する。つまり、画像制作における類似性の文脈の慣習すらも seeing-as という原初の体験、すなわち人間の視覚体系によって起こされた体験から発生したと主張するのである。

これらのデイヴィスの考察は、ゴンブリッチの芸術解釈の発展方法としての投射説を批判しているのであるが、この批判からどのような問題が明らかになるのだろうか。まずゴンブリッチの *Art and Illusion*(1959) に沿って、投射説を検討することからはじめる。さらに Davis1986 の Comments においてキャリアー(David Carrier) やメイナード(Patrick Maynard) は、ゴンブリッチもまた人間のあるものがある別のものとみなすという人間の能力に関する考察を詳細に試みていると批判している。キャリアーなどの批判に関して、デイヴィスは Davis1986 の Reply において自説はゴンブリッチの投射説に関して単純化して捉えていると認めてはいるが、やはりゴンブリッチは画像解釈の際に用いる文脈の慣習がどう形成されたかを説明していないと述べている。このような議論を通して、画像解釈と画像制作における画像の意味とは何であるのかということ考察していく。

### 参考資料

Davis.W. 1986. The Origin of Image Making, *Current Anthropology*, Vol.27, No.3 pp.193-215.

Davis.W 1987. Replication and Depiction in Paleolithic Art, *Representations*, No.19,pp.111-147

Gombrich. E.H. 2002. *ART & ILLUSION A study in the psychology of pictorial representation*, Phaidon Press Inc.